The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	観光客 （郵便的マルチュード）としての災害ボランティア ： 災害ボランティア論更新の試み
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	災害と共生. 2019, 2(2), p. 9-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

観光客（郵便的マルチチュード）としての災害ボランティア
災害ボランティア論更新の試み

Disaster Volunteers as Tourists (Postal Multitudes): Updating Theory of Disaster Volunteers

渥美公秀[1]
Tomohide, Atsumi

要約

本稿は、現代社会における災害ボランティアが現場でいかに振る舞うことが求められているかという観点から、これまでの交換様式に注目した災害ボランティア論を更新するものである。観光客の哲学（東, 2017）を参照し、災害ボランティアを郵便的マルチチュードとして捉え、その誤配の再演、不能の父といった概念を災害ボランティアの現場における振る舞いのキーフレーズ―「被災地に駆けつける」、「支援が集中していないところにこそ支援に入る」、「寄り添う」―と結びつけた。その結果、災害ボランティア論の運動論的戦略、災害ボランティア活動の継承といった面から、災害ボランティア論の更新を行えるとの展望を得た。

Abstract

The present study focused on theoretically and practically expected activities of disaster volunteers in the field and developed discussions for updating the theory of disaster volunteers based on modes of exchange. I referred to the philosophy of tourists (Azuma, 2017) and related three key phrases of disaster volunteers: “visiting the disaster area anyway”, “helping people without being helped,” and “being with survivors” to their key concepts: postal multitude, revival of mis-delivery, and incapable father), respectively. Accordingly, I concluded that the philosophy of tourists contributed to updating the theory of disaster volunteers in that it clarified the tactics of disaster volunteer movements and procedures for transferring the experiences of disaster volunteers to the next generations.

キーワード: 災害ボランティア、災害ボランティア論、観光客、郵便的マルチチュード
Keywords: Disaster Volunteers, Theory of Disaster Volunteers, Tourist, Postal Multitude

０．はじめに

これまで、災害ボランティアを理論的に考究するための参照点として、柄谷（2010）による『世界史の構造』、および、その後関連して公刊されている柄谷の論文・著作（e.g., 柄谷, 2015, 2016）に注目し、災害ボランティアが交換様式Dの到来を招く可能性を示唆してきた（渥美, 2017）。本稿では、観光客の哲学（東, 2017）から、観光客（郵便的マルチチュード）による「再誤配の戦略」や「不能の父」としての振る舞いといった概念を参照し、交換様式Dを招来しうる存在としての災害ボランティアについて、議論を深めたい。

１．これまでの議論：交換様式Dを招来しうる災害ボランティア

柄谷は、社会構成体の歴史を、A、B、C、Dという4つの交換様式のダイナミックスとして描く。まず、交換様式Aの前段として、定住しない遊動的な狩猟採取社会の交換様式Uの存在を認め、その否定によって交換様式Aが生まれるとする。交換様式Aは、贈与と返礼を基本とする相互扶助的な交換様式である。典型的には、共同体が対応し、その成員は、共同体に束縛される。交換様式Bは、収奪と再分配を基本とする交換様式であり、身分的支配－服従関係や国家がこれに対応する。交換様式Cは、商品交換を基本とする交換様式で、自由な合意に基づいてはいるが、実質的には、貨幣保有者と商品所有者との交換であって、（身分的というわけではない）階級社会が対応する。そして、交換様式Dは、交換様式A、B、Cを無化する様式として、強迫的に「いまだなかったもの」として未来から到来するようにして、交換様式Uの高次元での回帰として立ち現れる。交換様式Dは、局所的に短期間存在する、未だ到来していない想像的な交換様式である。

どんな社会構成体も、交換様式の複合体であり、いずれが支配的であるかによって異なった社会が出

*1 大阪大学大学院人間科学研究科　教授・Ph.D（Psychology）
Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Dr. Psychology.

現する。現代社会を柄谷（2006）の用語によって改めて整理すれば、交換様式 A、B、C が、資本＝ネーション＝ステートとして現前し、交換様式 D は来たるべき交換様式として捉えられている社会である。ここでは、交換様式 D が、現在支配的な交換様式 C の後に到来するとしても、交換様式 D は、交換様式 C を抹消するのではなく、交換様式 C や交換様式 B、A などと併存することに改めて注意しておこう。

交換様式 D の例として、普遍宗教、イオニアのポリスの原理であるイソノミア（無支配）とともに、災害後の社会が注目されている（柄谷, 2011）。具体的には、「災害それ自体『ユートピア』をもたらすことはなくても、資本＝国家への対抗運動の引きがねを引くことになりうる」（p.41）、「被災者や支援者は、一種の遊動民です。だから、住居が定まり、さまざまな諸関係に属するようになると、そのような自由と平等は失われる。D は消えてしまいます」（p.40）という指摘である。

交換様式 D は、交換様式 A が、一度抑圧された互酬性とその背後に遊動性を帯びて高次に回帰してきた結果生じるのであった。互酬性は、特定の相手と贈与と返礼を行う関係とされるから、それが高次になることを、ここでは、不特定の相手に対して行われる、返礼を求めない純粋な贈与の関係だと考えてみよう[1]。いわば、誰彼構わずに、贈与を行うが、その見返りは求めないということである。無論、贈与は、贈与であると察知された瞬間に贈与ではなくなるから、純粋贈与は、現実の贈与が理想としつつも決して到達できない理論的な存在としてあるとも言える。そして、この（純粋）贈与を可能にするのが遊動性である。実際、柄谷は、災害後に生まれた交換様式 D が消失する契機を定住による遊動性の消失に見ていた。

ここに、交換様式 D と災害ボランティアとの関係を見ることができる。すなわち、災害ボランティアが、災害時に遊動性を顕著に示すことができれば、災害ボランティアは、閉塞感に満ちた現在の資本＝ネーション＝ステートを超えていく契機となりうる。実際、災害 NPO は、その名称—非営利組織—が示すように、資本からの支配を受けないことを示しているし、国家の支配に対抗する潜在力を秘め、資本＝ネーション＝ステートとしての現代社会を超えていこうとするところに、その存在意義があるはずである。

災害ボランティアは、不特定の被災者に対する、見返りを期待しない一方的片務的な活動であり、言葉の純粋な意味で贈与を理想とする。だとすれば、災害ボランティアの活動こそが、交換様式 U が高次に回帰した交換様式 D であると考えることができる。こうした議論は、被災地のリレー論（渥美, 2014; Atsumi, 2014）の文脈で検討され、実証的にも成果が出始めている（e.g., 大門・渥美, 2016; Daimon & Atsumi, 2017; 三谷, 2015）。

整理すれば、災害ボランティアは、相手が誰かということを知らずに・確かめずに返礼を求めない純粋な贈与を行う。そこに遊動性が備わると、交換様式 U が高次に回帰する蓋然性が高まる。

こうして、現代社会における災害ボランティアが何に対抗して何を生み出そうとしているのかが明らかになった。しかし、ここまでの議論では、個々の災害ボランティアが現場でどのように振る舞うことが望まれているのかが依然として明確には捉えられていない。そこで、本稿では、東（2017）の観光客の哲学を参照しながら、それを災害ボランティアの現場で聞かれるキーフレーズに接続し、災害ボランティアの現場での振る舞いを検討し、災害ボランティア論の更新を試みたい。まず、観光客の哲学の概要を紹介し（第 2 章）、次に、災害ボランティアが郵便的マルチチュードとして捉えられることを論じる（第 3 章）。最後にそれらの議論が災害ボランティア論の更新へと繋がることを示す（第 4 章）。

２．観光客の哲学

東（2017）は、「グローバリズムの層とナショナリズムの層をつなぐヘーゲル的な成熟とは別の回路がないか、市民が市民社会にとどまったまま、個人が個人の欲望に忠実なまま、そのままで公共と不変につながるもうひとつの回路はないか。その可能性を探る企て」（p.127）として観光客の哲学を展開している。ここで、観光客は、観光地に来て、住民が期待した楽しみ方とはまったく別のかたちで楽しみ、そして、一方的に満足して帰る人々を指している。観光客とは、国家を離れ、他者の承認も歓迎も求めず、個人の関心だけに導かれて、ふわふわと行動する人々のことである。観光客は、さしあたって、こうした無責任さを帯びた「データベース消費」者、「二次創作」者として捉えられている。

現代社会を分析する際には、観光客の視線による分析が最初から必要である。「他者の欲望を欲望すること」が全面化する社会に生きている我々にとって、最初に「素朴」な住民がいて、つぎに観光客が来るという順序は転倒しており、最初から、二次創

作の可能性を織り込まなければ原作が作れないからである。すなわち、観光客の視線を織り込むことなしにはコミュニティが作れない。

東は、まず、観光客の背景に、現代社会の二層構造を見る。現代社会は、政治の議論はネーション単位で分かれているが、市民の欲望は国境を越えて繋がりあっている。ただ、「グローバリズムはナショナリズムを破壊したのではない。それを乗り越えたのでもない。ましてやその内部でナショナリズムを生み出したのでもない。それは、単純に、既存のナショナリズムの体制を温存したまま、それに覆い被せるように、まったく異質な別の秩序を張りめぐらせてしまったのである」（p.123）と捉え、この二層構造が併存していることを指摘する[2]。

ネグリとハート（Negri & Hardt, 2000 水嶋・酒井・浜・吉田訳 2003）は、グローバル化が進む冷戦後の世界において、国民国家と関わらない新しい政治の領域の存在を「帝国」とし、政治の層と経済の層をつなぐ可能性を帯びた存在としてマルチチュードという概念を提出した。マルチチュードは、自分の生（オイコス、労働、生活）の現場から運動を始めて帝国の批判に至るとされるので、オイコスから始まるポリス、私的な生を起点とする公共の政治を見据える存在として注目を浴びた。

東は、マルチチュード概念には、マルチチュードの力が、どのようにして現実の政治に結びつくのかという戦略論・運動論が欠如しているという致命的欠陥があると指摘する。その結果、ネットと愛さえ信じればあとは生政治の自己組織化で何とかなるという発想だと批判する。これは、マルチチュードは、上述の二層構造を想定しない「帝国」一元論から発想されているからである。また、先行するポストマルクス主義運動論の影響[3]を受けて、本来は存在するはずのない連帯が、まさにその連帯の不可能性を媒介として作り出されるという否定神学的で、結局、信仰告白で終わる議論になっているからだという。

ここで東は、デリダの誤配の概念に立ち戻り、郵便的マルチチュードを提唱する。郵便とは、現実世界の様々な失敗（誤配）の効果で存在しているように見え、またそのかぎりで存在するかのような効果を及ぼすという、現実的な観察を指す言葉として使われている。図式化していえば、マルチチュードを郵便化して、郵便的マルチチュードとし、その姿を観光客と捉えるわけである。

郵便的マルチチュード（観光客）は、物見遊山に出かける。そこには、連帯なしのコミュニケーションが見られ、誤配もある。そして、私的な欲望で公的な空間を密かに変容する蓋然性が見られる。一方、ネグリとハートのいうマルチチュードは、デモに行く。そして、コミュニケーションなしの連帯を試み、私的な生を国民国家の政治で取り上げろと叫ぶ。

ここで東は、ネットワーク理論を参照し、郵便的マルチチュードが何に、どのように対抗するのかという観点から、ネグリとハートのいうマルチチュードに見られた致命的欠陥を回避する。そして、郵便的マルチチュードの戦略を提示する。

我々は、同じ社会を前にして、スモールワールド性を感じるときと、スケールフリー性を感じるときがある。東は、双方の性質を、ナショナリズムとグローバリズムの二層構造、政治と経済の二層構造、「人間の条件」とその外部、政治とその外部、国民国家と帝国、規律訓練と生権力、正規分布とべき乗分布、人間がひとりひとり人間として遇されるコミュニタリアンなコミュニケーションの圏域と人間が動物の群れとしてしか係数されないリバタリアンな統計処理の圏域、などと対応させて捉える。そして、郵便的マルチチュード（観光客）は、スモールワールドをスモールワールドたらしめた「つなぎかえ」（誤配）の操作を、スケールフリーの秩序に回収される手前で保持し続ける抵抗の実践者と位置づける。

また、こうしたグローバリズムへの抵抗の場所について、「帝国の外部でも帝国の内部でもなく、帝国とその外部とのあいだに、すなわち、スモールワールドとスケールフリーを同時に生成する誤配の空間そのもののなかに位置づけることができるのではないだろうか。誤配をスケールフリーの秩序から奪い返すこと、それこそが抵抗の基礎だと考えられないだろうか」（pp.191-192）と問う。

郵便的マルチチュードの戦略とは、誤配を演じ直す「再誤配の戦略」である。出会うはずのない人に出会い、行くはずのないところに行き、考えるはずのないことを考え、帝国の体制にふたたび偶然を導き入れ、集中した枝をもう一度つなぎかえ、優先的選択を誤配へと差し戻すことである。結局、観光客の哲学とは、誤配の哲学である。

東は、最後に、郵便的マルチチュードを支えるシステムとして家族を挙げ、観光客の主体のあり方について試論を展開している。その際、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の続編に言及する。すなわち、「カラマーゾフの兄弟」は、その冒頭で書かれたことに反して、アリョーシャの物語になっておらず、物語の末尾になぜか多くの子供が登場する

ことから続編が構想されてきた。多くは、アリョーシャが皇帝暗殺のテロを働くという筋書きになっているが、東は、子供達のうちコーリャが成長してテロを働き、アリョーシャはそのただ傍にいるという続編を展開した亀山（2007）を支持する。結局、アリョーシャは、テロについて事前に知るけれどテロ組織の指導者にもならず、父のように守りもしない。何もしない「不能の父」として描かれる。そして、アリョーシャこそが「観光客（郵便的マルチチュード）の主体」（p.292）だと指摘する[4]。

整理すれば、郵便的マルチチュードは、物見遊山に出かけて連帯なしに誰彼となくコミュニケーションを図る、誤配の再演を企ててスケールフリー性に満ちた現状に抵抗する、しかし、その主体はいわば不能の主体である。

３．郵便的マルチチュードとしての災害ボランティア

ここで、最近の災害ボランティアの現場を振り返っておこう。災害ボランティアは、阪神・淡路大震災以来、秩序化のドライブにさらされ、現在では、遊動性を維持しようとする声がかき消されるほどに強力な秩序化が進行している（e.g., 大門・渥美, 2018）。実際、外部者として訪れる災害ボランティが不気味であると認識し、不気味さがもたらすリスクを軽減するために、災害ボランティアセンターのマニュアルが細分化されていき、全国的な組織が形成され、国や自治体、そして、私企業がそれを支える秩序化の動きが進行している。一方、遊動性を重視する災害ボランティアは、「被災地に駆けつける」、「支援が集中していないところにこそ支援に入る」、「寄り添う」といった姿勢を堅持しようとしているが、それは従来ほど目立たなくなってきている。

無論、災害ボランティアセンターは、初めて災害ボランティア活動に参加する人々や、個人で活動に参加しようとする人達にとっては、活動に関する情報が得られ、ボランティア保険の手続きもできて、様々なアドバイスも得られる便利な場所である。そして、センターでコーディネートされたボランティアは、いわば効率的に被災地に赴くことができるというわけである。また災害ボランティアセンターの運営スタッフも、多くの場合、地元被災地の方々であって、懸命にボランティア活動を支えている。従って、災害時のボランティア活動を進めていく上では、災害ボランティアセンターという仕組みが一概に排除される必要はないだろう。

一方、災害ボランティアセンターを経由しないで個々に独立して被災者への支援活動を展開する災害ボランティアは、災害ボランティアセンターでは把握しきれないような被災者・被災地の実態を目の当たりにして、臨機応変に被災者への対応を展開する。そこには災害ボランティアと被災者との信頼関係や交流が生まれることが多く、このことがその後の復旧・復興支援にも繋がるという点で、極めて重要な機能を果たしている。

こうして両者にそれぞれ長所があるのであれば、本来は、秩序化のドライブと遊動化のドライブのバランスこそが重要であろう。しかし、現状では、秩序化のドライブがあまりに強く作動し、遊動化のドライブが抑制されている現状がある。このことは、災害ボランティアセンターこそが唯一の正統な拠点であるとの認識の広がり、災害ボランティアセンターを経由することの推進、センターを経由したボランティアがいわば正統なボランティアであって、センターを経由しないで活動するボランティアが正統ではないボランティアではないとされたりする動きなどが証左となる。このような現状を省みれば、災害ボランティア論は、遊動化のドライブの回復という実践に理論的根拠を与え、秩序化のドライブと遊動化のドライブとのバランス（の最適化）に関する理論的実証的検討を進めることである。本論は、前者に対応した試みである。

遊動性を堅持する災害ボランティアに郵便的マルチチュードの姿を重ねることができる。第 1 章で整理したように、（遊動性を堅持する）災害ボランティアは、相手が誰かということを知らずに・確かめずに返礼を求めない純粋な贈与を行う。そこに遊動性が伴われれば、交換様式 U が高次に回帰する蓋然性、すなわち、交換様式 D の到来する蓋然性が高まる。一方、第 2 章で整理したように、郵便的マルチチュードは、物見遊山に出かけて連帯なしに誰彼となくコミュニケーションを図る、誤配の再演を企ててスケールフリー性に満ちた現状に抵抗する、しかし、その主体はいわば不能の主体である。

ここで、遊動性を堅持する災害ボランティアと郵便的マルチチュードとの関係をキーフレーズに接続させてみよう。まず、遊動性を堅持する災害ボランティアは、「被災地に駆けつける」。物見遊山（と揶揄されようと）に出かけていく郵便的マルチチュードと同様、（被災者への想いなどの言葉とともに）ふと出かける。遊動性を堅持する災害ボランティアは、災害ボランティアセンターによるコーディネー

トにとらわれることなく、誰彼となく支援を展開する。物見遊山に出かけた郵便的マルチチュードが、連帯なしに誰彼となくコミュニケーションを図るのと同様である。

次に、遊動性を堅持する災害ボランティアは、「支援の集中しないところ」に赴く。そこでは、支援の集中を回避することで、スケールフリー性が回避される。具体的には、誤配が演じられることで、支援の不平等化が回避される。郵便的マルチチュード（観光客）が、通常の観光地に飽き足らず、より独自の観光地、誰も行かない場所にも行きたくなることと対応する。

最後に、遊動性を堅持した災害ボランティアが「寄り添う」というとき、実は、何も具体的な事柄は特定されない。いわば不能である。不能の父として描かれたアリョーシャ、郵便的マルチチュードの主体である。

４．災害ボランティア論の更新

郵便的マルチチュードとしての（遊動性を堅持した）災害ボランティアという視点が確保された。その結果、災害ボランティア論としては、少なくとも以下の 3 点について更新の契機を得る。

第 1 に、秩序化のドライブと遊動化のドライブの拮抗は、ナショナリズムとグローバリズムの二層構造として捉え直すことができる。そして、災害ボランティアをそのどちらかの要員とするのではなく、両者を橋渡しする存在として位置づけることができる。実際、東日本大震災で活動した学生ボランティアへのアンケート調査によれば、秩序化のドライブを選好するボランティアがほぼ 40%、遊動化のドライブを選好するボランティアがほぼ 60%であった（渥美, 2014）。渥美（2014）は、これら 2 つのグループの存在をもとに、災害ボランティアが二極化していると論じたが、両者の相互作用や変遷については論じ得なかった。また、これまでは、災害ボランティアセンターを秩序化のドライブに支配された場、そこから離れた災害ボランティア（野良ボラ！）を遊動化のドライブに導かれた存在としたが、両者の混合形態に対する洞察は不十分であった。各ドライブの構成要素の精緻化とともに、秩序化のドライブを駆動させる社会的な背景（リスク管理社会）や遊動化のドライブを受容する背景（歓待の哲学、即興の組織論）へと検討を重ねることにしたい。

第 2 に、郵便的マルチチュードとしての災害ボランティアという立場からは、遊動性を堅持した災害ボランティアの運動論的戦略を得ることができる。誤配の再演という戦略である。実践的にいえば、災害ボランティアセンターによるコーディネートを仮に受けるとしても、そこから常に逃走し、目の前の被災者に向き合うことが、現在進行中の秩序化（スケールフリー性強化）への強力な抵抗になりうることが示される。より手続き的に述べれば、災害ボランティアの集中する場を回避し、支援が届いていない場へと注目を集めることが、秩序化のドライブのもとで活動する災害ボランティアと遊動性を堅持する災害ボランティアとのバランスを回復する 1 つの戦略であろう。このことは、いわゆるインクルーシブな視点を確保することに繋がろう。無論、インクルーシブという際には、誰がそれを言うのか、誰についてそれを言うのかといった困難が伴う。そして、100%のインクルーシブは、全体主義的な言論弾圧に紙一重となる重大な危機を含んでいる。いかに軽やかに、重層的に誤配を行うかということが課題となる。東のいう観光客の“不真面目さ”“無責任さ”が織り込まれていく場をいかに演出するかが課題だと言い換えてもいい。

最後に、郵便的マルチチュードとしての災害ボランティアという捉え方からは、災害ボランティア活動の継承に関する示唆も得られる。中でも、遊動性を堅持する災害ボランティアを回復し継承していくことに対する示唆がある。たとえば、遊動性を堅持する災害ボランティアは、被災者に寄り添うことが最重要であるとの信念をもって活動してきたかもしれないが、それを次の災害時に、また次世代に継承して行く方略は未だ見定められていない。その結果、各地で災害ボランティア講習会などが開かれたり、マニュアルが整備されたりしている。そして、寄り添うことから遊動的なドライブを伝承しようとして、秩序化がさらに進むという皮肉な場面に遭遇してしまう（ことも多い）。遊動性を堅持する災害ボランティア活動経験者は、不能の父として、次世代の災害ボランティアのただ傍にいると考えることは、積極的に秩序化のドライブを破壊することにはならないけれど（アリョーシャがテロを実行するわけではないけれど）、遊動化が生まれる希望はそこに見いだせるように感じる。

５．おわりに

これまでの議論では、災害ボランティアが交換様式 D を招来する可能性が示唆されていたにすぎなかった。本稿で、郵便的マルチチュードの概念と、誤

配の再演といった戦略、また、不能の父という主体の姿を得たことで、災害ボランティアが現場でいかに振る舞うかという点について、災害ボランティア論がわずかながらではあるが更新された。秩序化のドライブと遊動化のドライブとの関係のダイナミックス、誤配の再演戦略の深化、不能の父の姿勢など、今後、実践事例とともに整理していくことで、災害ボランティア論も豊かになり、交換様式 D もよりくっきりと姿を現すのではないかと考えている。

観光客の身勝手さ、軽やかな真面目さ（不真面目さ）は、今後の災害ボランティアや共生を考えていくときのキーワードであろう。実践は、ここからスタートするのだろうという予感をもつ。その予感を大切にしたいと考える背景として、熊本地震での奇妙な風景は決して繰り返してはならないからという極めて現場的な“感触”もあるし、阪神・淡路大震災からの時間を省みて、やはり、交換様式 D に垣間見る理想へと近づきたいという“想い”もある。

補注

(1) ここでは、サーリンズの共託（Sahlins, 1972）については保留する。

(2) 前章で述べた交換様式の併存との対応が見られる。具体的には、ここでいうナショナリズムは、柄谷の交換様式 A、B、C（i.e., 資本＝ネーション＝ステート）と対応し、ここでいうグローバリズムは、交換様式 D に対応する。

(3) 連帯において重要なのは個々の抵抗運動の中身ではなく、連帯の事実そのものといったラクラウらの議論など。

(4) もちろん、アリョーシャをこのように考えるのであれば、イワンとの議論（e.g.,有名な大審問官の場面）などは、アリョーシャの信念を問い、既存の秩序を疑い、その結果、沈黙が残るという予告的場面でもあるなどと解釈しても構わないかもしれない。すなわち、郵便的マルチチュードに対し、その信じるところが問われ、反論されるが、結局、沈黙だけが残るということである。

参考文献

渥美公秀（2014）．災害ボランティア 弘文堂

Atsumi, T. (2014). Relaying Support in Disaster-Affected Areas: The Social Implications of a “Pay-it-Forward” Network. *Disasters*, **38**(s2), 144-156.

渥美公秀（2017）．災害ボランティア論の再構築に向けて 災害と共生, **1**(1), 3-7.

東浩紀（2017）．ゲンロン 0 観光客の哲学 genron

大門大朗・渥美公秀（2016）．災害時の利他行動に関する基礎的シミュレーション研究：1995 年と 2011 年のボランティアでは何が違ったのか 実験社会心理学研究, **55**(2), 88-100.

Daimon, H., & Atsumi, T. (2017). “Pay it forward” and Altruistic Responses to Disasters in Japan: Latent Class Analysis of Support Following the 2011 Tohoku Earthquake. *Voluntus*, **29**(1), 119-132.

大門大朗･渥美公秀（2018）．災害時の被災地における被災者と支援者の関係を考える：2016 年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から 災害と共生, **2**(1), 25-32.

亀山郁夫（2007）．カラマーゾフの兄弟 5 光文社古典新訳文庫

柄谷行人（2006）．世界共和国へ――資本＝ネーション＝国家を超えて 岩波新書

柄谷行人（2010）．世界史の構造 岩波書店

柄谷行人（2011）．「世界史の構造」を読む インスクリプト

柄谷行人（2015, 2016）．D の研究：第 1 回－第 4 回 at プラス vol.23-26.

三谷はるよ（2015）．一般交換としての震災ボランティア―「被災地のリレー」現象に関する実証分析― 理論と方法, **30**(1), p.69-83.

Negri, A., & Hardt, M. (2000). *Empire*. Harvard University Press.（ネグリ, A.・ハート, M. 水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実（訳）（2003）．〈帝国〉：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性 以文社）

Sahlins, M.D. (1972). Stone Age Economics. New York: Aldine de Gruyter. (サーリンズ,M.D. 山内昶（訳）（2012）． 石器時代の経済学 法政大学出版会）